

情況と詩——木下夕爾と秋谷豊——

九里 順子

★一九六〇年は、安保反対運動に象徴されるように、戦後体制への不安と不信が噴出した年であった。六月十五日、デモ隊が国会議事堂に突入する中での東大生、樺美智子の死は人々に衝撃を与えた。このような状況の中で、戦前に詩人としての自己を作り上げ政治運動とは無縁であった木下夕爾、時代や社会の中で生きる主体を念頭に置いたネオ・ロマンティズムを提唱して詩誌『地球』を創刊(昭25・4)、主宰していた秋谷豊は、どのような内面の状況、つまり情況を詩に表出していたのか。

一 木下夕爾

【略歴】大正三(一九一四)年、現在の福山市御幸町に生まれる。『若草』の投稿家として注目され早稲田高等学院に学ぶが、家業の薬局を継ぐために名古屋薬学専門学校に転じ、昭和十三(一九三八)年に帰郷。昭和十五年、第六回「文芸汎論詩集賞」受賞。詩集に『田舎の食卓』(昭14)『生れた家』(昭15)『昔の歌』(昭21)『晩夏』(昭24)『児童詩集』(昭30)『笛を吹くひと』(昭33)、句集に『遠雷』(昭34)がある。『春燈』の創刊(昭21・1)に際して同人参加。第三次『地球』(秋谷豊主宰)の創刊同人(昭25・4)。同人詩誌『木靴』句誌『春雷』を主宰する。昭和四十(一九六五)年八月四日逝去。絶筆は、広島の原爆忌をうたった「長い不在」(『中國新聞』昭40・8・5)。「地球」の主宰者秋谷豊は、詩人夕爾について、「木下も野村(引用者注・「若くして死んだ野村英夫」)も、自然的な抒情詩人ではない。その清澄な美しさにもかかわらず、存在感をきびしく自分に課した自覚的な詩人であった。」(『地球』4号 昭42・7「特集——木下夕爾追悼」と述べている。(略歴は、『生誕100年 木下夕爾への招待——乾草いろの歳月——』ふくやま文学館 平26・9『福山の文学 第5集』ふくやま文学館 平16・3、他による)

1、「生の歌」(『木靴』 22冊 昭35・6)

僕は生きられるだろう

僕は生きる

眠りのあとに目覚めがくるように

僕は生きられるだろう

僕は生きる

冷えた皿にかたまる人工油脂のように

僕は生きられるだろう

僕は生きる

ともらなくなつた電燈の内部にきこえる

かすかな金属音のように

僕は生きられるだろう

僕は生きる

ただひとりでも僕は生きる

深夜の街のトラックの

タイヤに刺さった一本の画鋲のように

僕は自分の生を見知らぬ世界へ運ぶ

2、時代背景

一つの方向に驀進する政治と経済……安保改定前後の一九六〇年の日本

↓一月十九日に日米相互協力及び日米安全保障条約が調印され、五月十九日には衆議院で強行採決される。安保改定を阻止するために、革新勢力や全学連の抗議運動が激化していく。いわゆる安保闘争である。六月十五日、国会議事堂に突入したデモ隊が機動隊に制圧され、東大の学生であった樺美智子が圧死する（実際は扼死であったとも言われる）。首相岸信介は翌十六日にアイゼンハワー大統領訪日の中止を決定する。十八日、「樺美智子さんの死を悼む合同慰霊祭」が行われる。新安保条約は参議院の承認を得ないまま六月二十日に成立し、岸内閣は二十三日に総辞職する。二十四日、「樺美智子国民葬葬儀委員会」によって「国民葬」が行われる。（小熊英二『民主』と〈愛国〉』新曜社 平14・10、江刺昭子『樺美智子 聖少女伝説』文藝春秋 平22・5、による）

↓トラックのタイヤに刺さった一本の画鋲……驀進する巨大な権力に身を賭して刺さっていく
個
のイメージ。

①「大不平・小不平」『詩学』15巻12号 昭35・11）

大中小、色々ある。岸信介のような人物に国政を委ねてあの騒擾と醜態と悲劇を惹起したことがその最たるものだろう。やつとその人物も退陣を声明して後釜の総裁（首班）が登場したが、大して変わりばえもしない。大体、岸のような人物を選出する山口県の人々の気が知れないと思う。僕がこう云うと、君のほうにはいまの池田総理、かつての麦飯大臣がいるではないかということになつて、これでぎやふんである。いづれ解散・総選挙が行われるだろうが、僕らの広島県も田舎は昔から保守党王国で、これまた結果は見えないで知れているようなものだ。岸に尻つ尾を振つていた連中が、別な人へ、池田のほうへ早変わりするだけである。どうしたらよいだろう。と思いつながらさしあたつてはどうにもなりそうにないところが、すなわち「不平」というものである。↓時代の流れに違和を持ちつつも、一個人である自分の非力さを認めている。

★「僕は生きられるだろう／僕は生きる／ただひとりでも僕は生きる」とは、社会の片隅に生息していることを自覚しつつ、なお言葉は手放さないと夕爾の自己認識と意志の表明である。言葉の可能性は社会との緊張関係において成り立つことを認識しつつも、自分はその先頭に立つて戦う器ではないという厳しくも正確な自画像を描いている。

②「小鳥の巢」『詩学』15巻1号 昭35・1）第二、三連

パイプオルガンや

澄んだ歌声にこたえるように

青葉わかばのきらめくあたり

一本の短かい藁くずが
巢からぶらさがつて揺れていた

(平和も幸福も

あんなにひそやかでかぼそくて
いつも揺らいでいるものなのだ)

↓日常というものが危ういバランスの上に成立しているという認識。

③ 「死の歌」(『木靴』21冊 昭35・2)

……「死の歌」「生の歌」は、アンソロジー『広島県詩集 第2集 一九六〇年版』(広島県詩人協会 昭35・1)に「内部」と共に掲載された。タイトルも対になっているが、夕爾の生への諦念と疲弊が感じられる。

僕はまもなく死ぬだろう

僕は完全な無機物になるだろう

僕は今までもたなかった自由をもつだろう

僕は視る

僕を燃やす焰の色で

僕は語る

僕を燃やす風の音で

そうして僕は

自分を抱いていた地球を
別な愛のかたちで抱く

3、「僕は生きられる」

① 「僕は生きられる」(『詩学』19巻11号 昭39・11)

僕は生きられるだろう

僕は生きる

朝々の厨の隅に

場所をきめて鳴いている

一びきのエンマコオロギのように

僕は生きられるだろう

僕は生きる

石路の葉にまだ光っている

通り雨のひとつぶのように

僕は生きられるだろう

僕は生きる
棚田から棚田へと
自分のこだまを追いかける
午後の山峡の落し水のように

僕は生きられるだろう
僕は生きる
ただ一つ取りのこされた
高い梢の柿の実を見上げて
鶏小屋の陶器の卵のように

僕は生きられるだろう
僕は生きる

ただひとりでも僕は生きられる
稲妻が僕の窓に

くり返し貼りつける
ひとむれの萱のように
或いはまた
野なかに鬱々と立っている
一本の大きな櫟のように

↓「生の歌」の日常の片隅にありつつも、社会との緊張関係を想起させる内容に比べて、自然から得たモチーフに傾斜している。「一ぴきのエンマコオロギ」「通り雨の一つぶ」「山峡の落し水」と命の時間がどんだん短くなり、「鶏小屋の陶器の卵」と命の擬似形となり、稲妻が窓に照射する「ひとむれの萱」の影となって、実感が希薄化していく。それは、「一本の大きな櫟」という自然の時間に還っていく生である。それでも、「僕は生きられるだろう／僕は生きる／ただひとりでも僕は生きられる」と可能性と意志が限りなく接近している生を主張している。

②「僕は生きられる」(『バアゴラ』 11号 昭39・12)

僕は生きられるだろう

僕は生きる

白菜の肌を舐めまわす

朝のかまどの火のように

僕は生きられるだろう

僕は生きる

夜ふけの皿の煮凝こじりのように

肉と骨から完全に分離されて

僕は生きられるだろう

僕は生きる

途中でよじれちぎれながら
物をつかんでいる

枯れた蔓草のように

僕は生きられるだろう

僕は生きる

ただひとりでも僕は生きる

枯草の中で僕をつまづかせる

石のような

自分の生を確かめて

↓「生の歌」の社会との緊張関係、『地球』掲載形の自然への投影に比して、暮しの中の風景という性質が濃くなっている。それと共に、『地球』掲載形は秋の風物であったのに対し、こちらは「白菜」「枯れた蔓草」「枯草」と冬の風物である。更に、伝統的な和歌や俳句の情緒も感じさせる秋の風景に比べて、日常の中で見過ごされているものを扱っている。「中途でよじれちぎれながら／物をつかんでいる／枯れた蔓草」は、独自の着眼による擬人化であり、ぼろぼろになってもなお生きる意志が打ち出されている。

最終連は、それまでの二作品にはなかった能動的姿勢で結ばれている。「枯草の中で僕をつまづかせる／石のような／自分の生を確かめて」とは、生とは生きる足元を躓かせる負の本質であるという認識である。そこから自分の貧しさが風景として立ち上がってくる。夕爾は、最終の三行で自分の生の姿を明確に描き、可能性と意志の限らない接近から意志を打ち出し、負を抱え込んだ生を引き受ける決意を語る。

★昭和三十九年の二つの「僕は生きられる」では、景物とも重なる自然、及び暮しの中の囁目の景となり、社会的緊張関係は消える。時代は高度経済成長期に入り、十月には東京オリンピックも開催された。時代の勢い、華やきから生のリアリティを得ることはなく、二つの「僕は生きられる」に見た、暮しの些事とその周囲の目にも留まらない光景が生の実景なのである。それは、局限された日常の低音部である。

二 秋谷 豊（あきや ゆたか）

【略歴】大正十一（一九二二）年、現在の埼玉県鴻巣市に生まれる。昭和六（一九三二）年、父が死去。翌年には母も亡くなり、生家（石屋を営んでいた）は没落する。孤児となった秋谷は、父母の実家を転々とした後、昭和十二年に東京下谷の叔母の家に引き取られる。昭和十三年九月、『若草』の投稿仲間と第一次『地球』創刊。昭和十六年、日大文学部予科に入学（翌年中退）。昭和十八年に応召され、部隊はサイパン島に向かったが、秋谷のみ召集を解除される。昭和二十三年三月、東京大空襲で住んでいたアパートが全焼。八月に終戦となるが、二十余名の『地球』同人の大半が戦死、秋谷の弟も戦病死する。昭和二十一年三月、福田律郎らと詩誌『純粹詩』を創刊。昭和二十五年四月、第三次『地球』創刊。ネオ・ロマンティズムを提唱し、多くの戦後詩人たちの活躍の場となった。主な詩集に『遍歴の手紙』（昭二二）『葦の遍歴』（昭二八）『登攀』（昭三三）『降誕祭前夜』（同）『冬の音楽』（昭四四）『ヒマラヤの狐』（昭四六）『辺境』（昭五一）『ランプの遠近』（昭五六）『砂漠のミイラ』（昭六一）『廃墟と山靴』（平三・一九九二）『時代の明け方』（平七）『探検』（平九）『日本海』（平一七）がある。平成二十年十一月十八日逝去。（『秋谷 豊 詩集成』北溟社 平二一・七、の「秋谷 豊年譜」石井徹作成、による）

1、「雨季」（『地球』 31号 昭三五・8、『降誕祭前夜』所収）

ざわざわと鳴る

六月の深いみどりの中から
それは 流れ出る……

彼はぼくの深い葉の中から
すべてのもののひかりを

引き下ろす

彼は棘のように鋭く

ぼくの咽喉を焼く

やがてやってくる雨季

くちなしの花がはじける

動乱のときに――

言葉は武器だ

詩人は呪文のように叫んだ

旗をかついで

彼は朝から群衆の列の中に出かける

よごれた群衆は

旗をおしひろげて

大きな広場に向ってあふれるようにつきすすんだ

言葉は 白く光っている 夏のひかりをえぐる

詩人は言葉の可能性を信じた

銃のように

詩人は言葉の苦さを信じた

撃たれた

鶏の首のように

そのとき

血の中で 言葉が ぼくをとらえる

言葉は武器だ

言葉は喧嘩だった

言葉は一つの世界に流れている

言葉は無数の見しらぬ人を愛する

地平にふる 雨に打たれる

ぼくの言葉

白熱する群衆の中で

それがなぜ武器となるのか

ふしぎだ

光り だけ 白く光っている夏の日に

一人の少女がうごけない群衆の中におしつぶされた

少女は朝から群衆の列の中に出かけたのだ

コンクリートの言葉の下になって死ぬなんてことを

少女は知らなかったのだ

なぜなら

少女はひとりだったから
かっと日の照る

その白い朝 少女の家で小鳥が死んだ

「昨日まであんなに鳴いていたのに……」

深く えぐれた 夏の光りの中に

鳥は叫びをやめてしまったのだ

鳥はすべての言葉を失ったのだ

鳥籠の上の黒い太陽が

鳥の咽喉を燃いたのだ

少女は何かを叫ぼうとしたが

急にザラザラしたものゝが咽喉に流れこんできて

少女は何も叫べなかった

ざわざわと鳴る

よごれた六月のみどりの葉

街の隅に

路上にあふれ出る群衆の声

言葉は 砂をあび 言葉は もだえ

そのとき

言葉は大きな川の中に投げ込まれる

言葉は群衆の中を時のように流れる

すると 何かが いきなり

目の前におりてきて

群衆を遮断する

目もくらむ鋼鉄の物体がかねらの咽喉に打ちこまれたのだ

それは鉄のようであとからあとから打ちこまれる

群衆は打ちくだかれ

よろめきながら

つきすすんだ

群衆は雨にぬれ

鉄の言葉をつきぬけて

ふたたび暗くなった乾燥の国にもどってくる

六月の夜の深いみどりの中に

旗がうすよごれて立っている

旗の下に雨に打たれて眠っている

少女の顔

少女は何も知らなかったのだ

沈黙した鳥の悲しみに

少女は気がつかなかったのだ

臆病なぼく

何も叫べなかったぼく

まっくらな夜
鳥のように叫びをやめた少女の上に
ぼくは眠っている愛をさましてやりたい

大きな広場に向ってつきすすむ言葉は

棘のように鋭く

ぼくを遮断する

銃のように

言葉が 血の中で ぼくをとらえる

武器となっても

人は眠っている愛をさますことはできないのだ

死んでしまった

一人の悲しみをつぐなうことはできないのだ

ざわざわと鳴る

白昼の

葉の中からあとからあとから流れ出る

★連帯を呼びかける筈の言葉は、遮断する言葉、参加者の咽喉に打ち込まれて焼く言葉、コンクリートの言葉でしかなかった。愛を生むべき言葉は死を生んでしまった。武器としての言葉は詩人に跳ね返って血を流す。ざわざわと鳴る緑の中から湧き出る「それ」とは、生あるもののエゴイズムであろうか。

2、秋谷の同時代評

①「一九六〇年展望 詩誌」(『現代詩手帖』4巻1号 昭36・1)

「● 表現者としての抵抗線」

『詩組織』の中川敏は社会主義リアリズムの方向を組織者としての実践的行動力に求めているが、組織の問題が創造上の問題として把握されていないのが社会的リアリズムの現状なのであって、組織はけつして詩人のドクトリンとはなり得ないものだ。いまわれわれに明白に語れることは、ただ一つ圧迫者に立ち向ってゆく表現者としての自らの行為だけである。もちろん、われわれは詩人である前にまず生活者でなければならぬが、このことはかりに歴史や社会が改変されたとしても、やはり「革命者に対しても守ろうとする」われわれの(少くともぼくの)表現者としての抵抗線となるにちがいないのだ。

(略)

ぼくも寺山の意見には大体賛成で、たとえば街頭デモをした詩人の存在をあまり買いかぶつてはいけないと思っている。これは戦争中の『辻詩集』や『愛国詩選』の精神と同質のものでしかないのだ。いや戦後にだつてある。『松川詩集』や『死の灰詩集』や『メーデー事件の詩にはほんとうの芸術的感動をもつた作品はほとんどみられなかつたといつていい。

②「安保賛成―ぼくの意見―」(『地球』31号 昭35・8)

ぼく自身、戦争を骨身に徹して思い知らされた年代の一人だが、「安保は戦争に結びつく」というスローガンの持つセンチメンタルなムードには反撥を感じるのだ。これは六月十五日の国会デモで死んだ女子学生の死を「虐殺」とよんで平気な顔をしているいわゆる進歩的文化人や学者たちの言葉の無責任さと相通じるものがある。

六・一五の評価についても、全学連の行動を正当化するだけで、権力政治に対して向けられるべきエネルギーが、人間の憎悪に変わっていることを指摘した進歩的文化人はひとりもいなかった

た。こういう人民民主主義にはぼくはついてゆくことができないのである。

安保によって戦争を防ぐという見方だつて成り立つわけだし、また、中立によって平和を守り得るといふ保証はどこにもないのだ。もちろん、中立的な立場による平和共存は望むところであるが、安保が中共ソビエトに敵対する軍事同盟というのは早急な論理というほかはない。一方、中ソの軍事同盟が政治の予測の上に立つものである限り、やはり現在の時点でその結果を仮定して判断することは早計なのである。

(略)

しかし、安保賛成、反対の態度にかかわらず、詩人団体がひとつおぼえのスローガンで声明することに反対なのだ。問題は詩人がどこまで自分自身でありうるかということである。

(略)

詩人はどうあるべきか？ 今日状況の中でそれをはっきりと規定することは困難である。ただ、ぼくにはつきりと言いうることは、いついかなる場所、いついかなる時代でも、詩人は真実の発条でなければならぬということだ。

(略)

安保賛成のぼくのこの一文は、自民党的意見だと非難されるかも知れない。しかし、たとえば、臆病者といわれようとも、ぼくは自分の言葉に責任をもちそれを見つめてゆきたいと思っている。
★詩人はそれぞれ自分の言葉を持たなければならぬ。敵と味方に二分する組織の言葉に自分をゆだねてはならない。掲げるテーマは変わっても、二分する言葉に無自覚な姿勢は、戦時下の戦意昂揚も現在の反戦・反権力デモも同じであるという注目すべき指摘をしている。

3、『現代詩』の姿勢

① 関根弘「安保条約反対闘争歌」〔『現代詩』7巻5号 昭35・5〕

(第四番)

前進するときだ
今だ！ たいせつなときは
貧しさからの解放のために
戦線が光
うしなわないうちに
ひと足早く
勝利してしまうのだ
進め 進め 前へ進め！

「現在林光氏が作曲中、近く完成する」という添え書きがある。

② 関根弘「編集ノート」〔『現代詩』7巻8号 昭35・8〕

(略)

日本人民の解放闘争の前線に立つて、敵権力の手によつて虐殺された樺美智子さんの英雄的死にわたしたちはとくに学ぶところがなければならぬまい。わたしたち詩人は英雄主義という言葉を使つてはなるまいが、英雄的という言葉は戦後使つて使うことができるのだという気がする。けれども、自らの官僚的セクト性のゆえに、樺美智子さんの死の意味を正當に評価できず、ひとしずくの涙をそそぐことも、復讐を誓うことも拒否した一団のあることをわたしたちは忘れてなるまい。(略)

★『現代詩』は、共産党員が中心メンバーであった新日本文学会の詩雑誌として、昭和二十九年七月に創刊され(昭和三十二年九月に新日本文学会から独立する)、一九六四年十月の終刊まで

全一二〇冊を刊行した。社会変革と結びつく詩の実践と方法を模索した。岸政権批判と共に政権打倒の主導争いに傾斜していた共産党も批判している。(参考 『現代詩 復刻版 別冊』の「解題」澤正宏・加藤邦彦・田口麻奈・鳥羽耕史 三人社 二〇二〇・四)